セフの域内貿易[1)]

野々村　一雄

I　セフ市場の性格

セフ諸国の域内貿易を論ずるに当って，まず，域内貿易のおこなわれる舞台，すなわちいわゆるセフ市場の性格をいかに規定するかが，第1に問題となる。

ここで，まず第1に，われわれが想起するのは，スターリンのいわゆる「2つの世界市場論」であり，したがって，社会主義諸国の貿易の舞台としての「社会主義世界市場」論であろう。すなわち，スターリンは，その『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』(1952年)のなかで，つぎのように述べている。「第2次世界戦争とその経済的結末のもっとも重要な経済的結果と考えなければならないものは，全包括的な単一の世界市場の崩壊である。」「全包括的な単一の世界市場が崩壊して，その結果，われわれはいま，対立し合う2つの平行的な世界市場をもっている…。」[2)]

この「2つの世界市場」論，「社会主義世界市場」論のあやまりは，すでに言われているところで，この問題についての正面切った議論は，いまここではとりあげない[3)]。ここでは便宜上，ニコラス・スパルバーが，この「第2の世界市場」"Second World Market" について述べたことを，そのままここに引いておこう。彼はつぎのように述べている。「スターリンはこのようにして，ソヴェト型の数個の経済の存在が1つの特別な貿易ブロックを生み出し，そのメンバーである経済は彼等自身の間でのみ取引するという事実を強調した。特別な特徴をもった1つの制限された市場が東に生み出されたことは事実であるが，それを完全に自分たちだけの『世界市場』と呼ぶことは全く正確でない。第1に，この市場は高度に選択的なメンバーシップをもっており，それへの参加は各国の政治的経済的構造のモディフィケーションを予め条件づけられており，しかもこの条件は必要ではあるが，それだけでは決して充分ではない(たとえば，ユーゴスラヴィアの場合)。第2に，この市場の参加者たちはいまなお圏外の市場で取引しつづけており，そこでの貿易関係を拡大することを期待している。第3に，制限された計画経済の市場内での国際貿易の比較的な重要性は圏外の市場におけるそれと比較すれば，きわめて限られたものだからである。ともかく，その特殊な性格が何であろうとも，地域的な，あるいはまた別のタイプの集合化は，現実に存続しているが，それは世界市場の**一部分**である。」[4)]「社会主義世界市場」論については，このくらいで充分であろう。

1970年11月ブダペストで開かれた国際会議の席上で，O. ボゴモロフは，「セフ諸国の国際市場」(彼の報告のタイトル)について，つぎのような規定を与えている。「セフ諸国の市場…は，多くの経済的制度的な障壁によって，各国の国内市場からも世界市場からもひき離されている，商品・貨幣取引の特殊な領域である。」「セフの市場は，2つの社会的に相対立する市場，社会主義市場と資本主義市場の弁証法的統一として考えられる世界

---

1)　この小論は，拙著『コメコン体制』(1975年7月岩波書店)の第3章「外国貿易と貿易価格」の第1節「外国貿易の発展」が，非常に粗雑な走り書きに終っているので，その叙述を補充ないし補完するために書かれたものである。

2)　И. Сталин, «Экономические проблемы социализма в СССР», Госполитиздат, 1952, стр. 30–31.

3)　木下悦二『資本主義と外国貿易』有斐閣 1963年1月 75–96ページ，参照。

4)　Nicolas Spulber, *The Economics of Communist Eastern Europe*, MIT Press, 1957, pp. 409–410.

第 1 表 A　セフ各国の貿易額と域内貿易額(実数)
(単位：百万ルーブル)

年度	(A)貿易額	(B)域内貿易	B/A(%)
1950	7,375	2,944	39.9
1955	13,998	5,677	40.6
1960	23,900	14,300	59.8
1965	35,609	22,400	62.9
1966	37,555	…	…
1967	40,543	…	…
1968	44,142	…	…
1969	48,700	30,007	61.6
1970	54,920	33,317	60.7
1971	59,738	36,317	60.8
1972	66,426	41,572	62.6
1973	78,706	45,890	58.3
1974	98,975	52,070	52.6

資料 1) 1950, 55, 66-69 年は，Совет Экономической Взаимопомощи/Секретариат, 《Статистический Ежегодник стран-членов Совета Экономической Взаимопомощи. 1971》, М., 《Статистика》, 1971, стр. 341(以下《Ежегодник СЭВ》と略称する)。
2) 1960, 65, 70-74 年は，《Ежегодник СЭВ, 1975》, стр. 323。

市場の一部分である。」[5]

同じ集会でチェコスロヴァキアの Z. ハルプスキーは，つぎのようにのべている。「世界経済内部における社会主義世界体制の相対的な分離性は，社会主義世界市場(またはセフ市場)の相対的分離性のなかに現われる。…しかしながら，同時に，社会主義世界市場の比較的に閉鎖的な性格を過大評価してはならない。両体制の 2 つの市場の孤立性は，社会主義世界市場の閉鎖性が何ほどか強まるとしても，それは，マイナスの絶対的な結果(損失)の発生を排除ないし阻止する一時的方策をあらわすという意味で，相対的である。」[6]

II　域内貿易の発展

セフ諸国の貿易額。セフ諸国の貿易額は(第 1 表，参照)，1950 年を 100 として 1974 年は 1342 である。つまり，セフが 1949 年に成立してから

第 1 表 B　同左(指数)

年度	貿易額 1950年=100	貿易額 1960年=100	域内貿易 1950年=100	域内貿易 1960年=100
1950	100	31	100	21
1955	190	59	193	40
1960	324	100	486	100
1965	483	149	761	157
1966	509	157	…	…
1967	550	170	…	…
1968	599	185	…	…
1969	660	204	1,019	210
1970	745	230	1,132	233
1971	810	250	1,234	254
1972	901	278	1,412	291
1973	1,067	329	1,559	321
1974	1,342	414	1,769	364

資料：A 表によって筆者計算。

以後，貿易額は約 4 半世紀に 13 倍になったことになる。平均成長年率は 11.4% である。これを 5 年毎にくぎってみると(第 2 表参照)，1951—55 年の成長年率は 13.7%，1956—60 年は 11.3%，1961—65 年　8.3%，1966—70 年　9.1%，1971—74 年　15.9% となる。50 年代には 11—14% の高い成長率を示し，60 年代にいたって成長率はやや低迷し，70 年代以後，ふたたび高い成長率にもどったことがわかる。

第 2 表　セフ諸国の貿易および域内貿易の成長年率(単位：%)

年度	貿易額	域内貿易
1951-55	13.7	14.1
1956-60	11.3	20.3
1961-65	8.3	9.4
1966-70	9.1	8.3
1971-74	15.9	11.8

資料：第 1 表によって筆者計算。

つぎに，セフ諸国の貿易額を国民所得および工業総生産と比較して，その弾性値を計算してみよう(第 3 表)。1950 年代の前半，すなわち，セフ発足直後は，工業総生産にたいする貿易の弾性値は低い。数値が 1 をわる国が多い。50 年代後半から現在までについていうと，その間の期間で，60 年代後半において，貿易の弾性値が若干低落し，70 年代にはいって，それが急速に回復する。

域内貿易。域内貿易は(第 1 表，参照)，1950 年を 100 として，1974 年には 1769 である。すなわち，セフ成立後の約 24 年間に域内貿易が 18 倍弱になったことを示している。平均成長率は 12.7% である。これを 5 年毎に区切ってみると(第 2 表，参照)，1951-55 年 14.1%，1956-60 年 20.3%，1961-65 年 9.4%，1966-70 年 8.3%，1971-74 年 11.8%

5) O. Bogomolov, "The international market of the CMEA countries," T. Kiss, T. Földi, I. Schweitzer ed., *The Market of Socialist Economic Integration. Selected Conference Papers*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1973, p. 31 (T. キッシュ監修 名島修三訳『社会主義経済統合』合同出版 1975 年 11 月，31 ページ)。
6) Z. Chalupsky, "Characteristics of the socialist international market," *Ibid.*, pp. 61-62 (前掲邦訳書 63 ページ)。

第 3 表　セフ各国の貿易の弾性値

	国名	国民所得 (A) 指数	国民所得 (A) 平均年成長率(%)	工業総生産 (B) 指数	工業総生産 (B) 平均年成長率(%)	貿易額 (C) 指数	貿易額 (C) 平均年成長率(%)	C/A	C/B
一九五一～五五 1)	ブルガリア	178	12.3	190	13.7	195	14.3	1.2	1.0
	ハンガリー	132	5.8	186	13.2	177	12.1	2.1	0.9
	ドイツ民主共和国	185	13.1	…	…	282	23.1	1.8	…
	モンゴル人民共和国	…	…	126	4.8	146	7.9	…	1.6
	ポーランド	151	8.6	212	16.2	142	7.3	0.8	0.5
	ルーマニア	185	13.1	202	15.1	194	14.2	1.1	0.9
	ソ連	171	11.4	185	13.1	200	14.9	1.3	1.1
	チェコスロヴァキア	148	8.2	167	10.8	157	9.5	1.2	0.9
一九五六～六〇 2)	ブルガリア	158	9.6	209	15.9	247	19.8	2.1	1.2
	ハンガリー	134	6.1	144	7.4	160	9.8	1.6	1.3
	ドイツ民主共和国	141	7.1	154	9.0	178	12.3	1.7	1.4
	モンゴル人民共和国	…	…	240	19.2	164	10.5	…	0.5
	ポーランド	138	6.6	159	9.8	153	8.9	1.3	0.9
	ルーマニア	138	6.6	168	11.0	154	9.0	1.4	0.8
	ソ連	155	9.2	164	10.4	172	11.5	1.3	1.1
	チェコスロヴァキア	140	6.9	163	10.3	168	11.0	1.6	1.1
一九六一～六五 3)	ブルガリア	138	6.7	174	11.8	195	14.3	2.1	1.2
	ハンガリー	122	4.1	144	7.6	164	10.4	2.5	1.4
	ドイツ民主共和国	118	3.4	132	5.8	134	6.1	1.8	1.1
	モンゴル人民共和国	…	…	127	4.9	106	1.2	…	0.2
	ポーランド	135	6.2	150	8.5	162	10.2	1.6	1.2
	ルーマニア	155	9.2	191	13.9	160	9.9	1.1	0.7
	ソ連	137	6.5	151	8.6	145	7.7	1.2	0.9
	チェコスロヴァキア	110	2.0	129	5.3	143	7.5	3.8	1.4
一九六六～七〇 4)	ブルガリア	152	8.8	168	11.0	164	10.3	1.2	0.9
	ハンガリー	139	6.9	135	6.1	160	9.8	1.4	1.6
	ドイツ民主共和国	130	5.3	137	6.5	160	9.8	1.9	1.5
	モンゴル人民共和国	…	…	126	4.7	110	2.0	…	0.4
	ポーランド	133	5.9	149	8.3	157	9.4	1.6	1.1
	ルーマニア	143	7.5	175	11.8	174	11.8	1.6	1.0
	ソ連	145	7.8	150	8.5	151	8.6	1.1	1.0
	チェコスロヴァキア	139	6.9	139	6.8	140	6.9	1.0	1.0
一九七一～七四 5)	ブルガリア	134	7.6	140	8.8	176	15.2	2.1	1.7
	ハンガリー	129	6.6	130	6.8	173	14.7	2.2	2.2
	ドイツ民主共和国	124	5.6	128	6.4	162	12.8	2.3	2.0
	モンゴル人民共和国	130	6.8	145	9.7	182	16.2	2.4	1.7
	ポーランド	147	10.1	148	10.3	218	21.5	2.1	2.1
	ルーマニア	155	11.6	164	13.2	218	21.5	1.9	1.6
	ソ連	126	6.0	133	7.4	179	15.7	2.6	2.1
	チェコスロヴァキア	123	5.3	129	6.6	158	12.1	2.3	1.8

資料：《Ежегодник СЭВ, 1970》, стр. 21-28.
注：1) 指数は 1950 年を 100 とした 1955 年のそれである。
2) 指数は 1955 年を 100 とした 1960 年のそれである。
3) 指数は 1960 年を 100 とした 1965 年のそれである。
4) 指数は 1965 年を 100 とした 1970 年のそれである。
5) 指数は 1970 年を 100 とした 1974 年のそれである。

である。前と同じように域内貿易は 50 年代に大いに伸び，60 年代は若干低迷し，70 年代にはいって，ふたたびその成長力をとりもどしたといえる。

60 年代における域内貿易の成長の低迷について，ポーランドのソルダチュークはつぎのようにのべている。「セフ諸国では，1963-1968 年の間に，

第 4 表　1963-1968 年の平均成長年率　(単位：%)

国名	国民所得	工業生産	輸出 総額	輸出 域内輸出	輸出弾性値 国民所得に対して 輸出総額	輸出弾性値 国民所得に対して 域内輸出	輸出弾性値 工業生産に対して 輸出総額	輸出弾性値 工業生産に対して 域内輸出
ブルガリア	5.4	12.0	14.1	13.1	2.6	2.4	1.2	1.1
ハンガリー	5.5	7.1	8.2	8.6	1.5	1.6	1.2	1.2
ドイツ民主共和国	5.0	5.9	6.9	5.9	1.4	1.2	1.1	1.0
ポーランド	6.5	8.5	10.5	10.9	1.5	1.6	1.2	1.3
ルーマニア	8.9	12.4	9.9	5.8	1.1	0.6	0.7	0.5
ソ連	7.9	9.0	7.9	6.3	1.0	0.8	0.8	0.7
チェコスロヴァキア*	4.0	5.1	5.5	4.0	1.4	1.0	1.1	0.8
ヨーロッパの社会主義国(ソ連を除く)	5.5	8.2	8.0	6.8	1.4	1.2	0.9	0.8
セフ加盟国	7.0	8.8	8.0	6.6	1.1	0.9	0.9	0.8

資料：J. Soldachuk, "Trade and cooperation among CMEA member countries," T. Kiss, T. Földi, I. Schweitzer, ed., *The Market of Socialist Economic Integration. Selected Conference Papers*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1973, p. 138.
備考：Soldachuk はこの表を *Economic Bulletin for Europe*, Vol. 21, 1970 からつくったと注記している。
* チェコスロヴァキアについてのみ，1968 年には輸入の率が非常に低いので，1962-67 年をとった。

国民所得は 7%，工業生産は 8.8% の平均成長年率で増大した。同期間に，輸出総額は年平均 8% で成長したが，相互貿易の成長はわずかに 6.6% であった。同期間に，国民所得および工業生産にたいする輸出総額の弾性値(elasticity coefficient)は，1.1 および 0.9 であるが，セフの相互貿易では，それがわずかに 0.9 および 0.8 である。このように，セフ加盟諸国の相互貿易は，この対象期間には，外国貿易総額の成長率よりはるかにおそい率で，国民所得や工業生産の平均成長率とくらべると，さらに低い率で成長した。」[7] 彼はそこで，つぎのような表(第 4 表)を示している。これでわかるように1963-68 年には，域内貿易の弾性値が 1 より低く，それが貿易の弾性値を低めていることを示している。ソルダチュークは，そのあとにつづく叙述のなかで，その原因として，生産の専門化と協同化の不足，双務貿易協定の影響などをあげている[8]。これらの原因は，いずれも 60 年代の，とくに 60 年代後半のセフの活動全体をみると，容易に認証しえられるものである[9]。

7) J. Soldachuk, "Trade and cooperation among CMEA member countries," *Ibid.*, p. 137 (前掲邦訳書 143-144 ページ)。
8) *Ibid.*, pp. 138-142 (前掲邦訳書 144-149 ページ)。
9) 拙著『コメコン体制』岩波書店 1975 年 7 月，参照。

第 5 表　外国貿易における域内貿易の比重　（単位：%）

国　名	1950	1962	1963	1969	1970	1971	1972	1973	1974
ブルガリア	88.4	79.0	80.3	76.2	74.4	75.1	78.1	77.2	70.2
ハンガリー	61.4	58.2	66.3	64.5	62.1	63.9	65.0	63.1	59.0
ドイツ民主共和国	72.3	75.8	74.9	68.7	67.3	67.4	67.8	65.9	61.0
ポーランド	58.4	60.0	61.1	62.4	63.1	61.9	59.4	53.4	47.0
ルーマニア	84.4	65.2	64.6	48.9	49.3	47.2	46.6	43.2	34.7
ソ連	56.9	57.5	59.1	56.7	55.6	56.2	59.6	54.0	48.9
チェコスロヴァキア	54.4	69.9	69.5	65.1	64.2	64.2	67.1	65.2	61.0

資料：《Ежегодник СЭВ》, 1970, стр. 354; 1971, стр. 342; 1972, стр. 325; 1973, стр. 353; 1974, стр. 333; 1975, стр. 325.

域内貿易の比重。貿易全体のなかでの域内貿易の比重(第 5 表)は，60 年代を通じてほぼ 60% 台を維持し，73 年以後 60 %を割っている。これは，必ずしも，セフ諸国が域内貿易から離れだしたことを意味するものではなく，東西貿易の拡大が，域内貿易の絶対的増加にもかかわらず，相対的減少をひきおこしたとみる方がいいと思われる。

III　域内貿易の問題点

セフ加盟諸国の工業の発展のために，原料および燃料問題は，非常に重要である。「セフ加盟の多くの諸国で，この種の生産物の輸入にたいする，生産発展の依存性は，きわめて大きい。」[10]「セフ加盟諸国のうち，原料の保有状況において，ソ連に次ぐ位置を占めているポーランドでさえ，直接にか間接にか輸入原・燃料を利用しない工業部門はない。ポーランドの工業に働いている労働者の２人に１人は，輸入原料を使って労働している。ポーランドの化学工業の総生産価額の 15% 以上は，ソ連から提供された原料から生産される。ポーランド人民共和国のセルローズ需要の 34% が，また，若干の化学肥料の生産のための原料需要の 30% 以上が，ソ連の引渡し分によって賄われている。」「ソ連からの原料輸入は，他のセフ加盟諸国にとっても，きわめて重要である。ソ連からの輸入によって，セフ諸国の，石油，ガス，銑鉄の需要のほとんど全てが，そして，石油製品，棉花，圧延鋼等々のかなりの部分が，賄われている。」[11]

1960-65 年の期間について，アウシュはつぎのような点を指摘している。「社会主義的工業化の結果として，完成財，そして何よりもまず機械および設備の，セフの域内貿易にしめる割合が，すべての国で増大した。この傾向はセフの後進諸国の貿易においてとくに強かった。」[12]「後進国が先進国に売却する機械の品質はしばしば不適当なものであった。それだけでなく，それ(増大する機械輸出)が，後進国の先進国にたいする原料輸出の割合を低下させた。」[13]アウシュによれば，このような矛盾は，ソ連の原料輸出の拡大によって，中和されるか，解決されるかしたという[13]。

アウシュはつづけて，つぎのように言っている。「1950-1960 年の諸年の平均で，若干の重要原料のソ連による供給は，他のセフ諸国の輸入の中で，以下のような比率(%)を示した。すなわち，鉱物油 95%，鉄鉱石 81%，圧延鋼 60%，アルミニウム 85%，木材 70%，棉花 53%。ソヴェト連邦の外国貿易の構造が，ツァー時代のロシアのそれと比べて，この国の産業的発展にふさわしい変化を示さないのは，正に，主として上に述べたことの結果である。」[13]

ここで彼は，つぎのような表を示す(第 6 表)。この表について，彼は，「1960 年の分では，鉱産

第 6 表　ツァー・ロシアとソ連の輸出構造の比較
（単位：%）

品目別	1913-1914 年のロシア	品目別	1960 年のソ連
鉱産物，工業原料	2.5	工業原料および中間製品	64.1
鉱工業の中間製品	11.0		
工業製品	12.7	工業製品	23.4
農産品	73.8	農産品	12.5
合　計	100.0	合　計	100.0

資料：Sándor Ausch, *Theory and Practice of CMEA Cooperation*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1972, p. 116.

10)　И. П. Олейник, В. П. Сергеев, ред.,《Проблемы социалистической экономической интеграции》, Изд-во《Мысль》, Москва, 1974, стр. 178.

11)　Там же, стр. 179. (なお，オレイニク，セルゲーエフ共編の前掲書は，セフ加盟諸国の経済学者の共同労作であって，注(10) (11) の引用箇所の筆者は，ポーランドのチューバ Л. Цюпа である。)

12)　Sándor Ausch, *Theory and Practice of CMEA Cooperation*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1972, p. 113.

13)　Sándor Ausch, *op. cit.*, p. 115.

第 7 表　ソ連の原・燃料輸出の総輸出に占める比重

(単位：%)

年度	燃料鉱物	原料，中間製品	合計
1937	…	50.8	…
1950	15.7	39.5	55.2
1955	27.8	29.5	57.3
1960	37.6	27.3	64.9
1965	40.1	22.1	62.2
1969	36.9	21.6	58.5
1970	38.1	19.5	57.6
1971	39.3	19.7	59.0
1972	39.1	16.8	55.9
1973	39.1	16.2	55.3
1974	42.9	18.1	61.0

資料：
1) 1960, 65, 70, 73, 74 年は《Ежегодник СЭВ, 1975》, стр. 329.
2) 1972 年は《Ежегодник СЭВ, 1974》, стр. 337.
3) 1971 年は《Ежегодник СЭВ, 1973》, стр. 357.
4) 1950, 1955, 1969 年は《Ежегодник СЭВ, 1971》, стр. 345.

品と他の工業用原料の輸出が，中間製品のそれと分離されていない」との点を指摘したあとで，鉱産品や原料の輸出が，「1913-1914 年にくらべてひどく増加し，それが農産品輸出にとって変った。」と指摘している[13]。

いまこれをセフの統計年鑑によって表出すると，第7表のとおりである。これは，他の諸国にくらべて非常に高い。他の諸国についてくわしく表出するのは煩雑なので，1974 年について，第 7 表の「合計」欄に当る数字を示してみよう。——ブルガリア 41.8%，ハンガリー 40.2%，ドイツ民主共和国 21.5%，ポーランド 39.1%，ルーマニア 49.2%，チェコスロヴァキア 28.6% である。何れも，ソ連より低い。ここでは示さなかったがこれまでの経過をみると，ブルガリア，ルーマニア，ポーランドは，他の諸国にくらべて，上にのべた品目の輸出の割合が比較的大きい。これは，ブルガリアが農業国，ルーマニアが石油生産国，ポーランドが石炭生産国などであったからであるが，これらを割引いて考えても，ソ連が圧倒的にセフ諸国にたいする原料の主たる輸出国であることは否定できない。

第 8 表　セフ諸国の原料貿易総額における各国の比重

(単位：%)

	ブルガリア	チェコスロヴァキア	ポーランド	ハンガリー	ドイツ民主共和国	ルーマニア	ソ連
セフ諸国への輸出	8	5	5	5	2	5	69
セフ諸国からの輸入	2	24	9	8	36	4	17
純輸入(−)または純輸出(+)	+6	−19	−4	−3	−34	+1	+52

資料：Gunther Kohlmey, Weltwirtschaftliche Strukturveränderungen und sozialistische Wirtschaftsplanung, *Aussenhandel*, Berlin, No. 12, 1964(Cited by Sandor Ausch, *Theory and Practice of CMEA Cooperation*. Akadémiai Kiadó, Budapest, 1972, p. 100).

第 9 表　セフ加盟諸国の原燃料輸出および輸入　(1974 年)

	A輸出	B輸入	A-B
ブルガリア	41.8	44.7	− 2.9
ハンガリー	40.2	44.9	− 4.7
ドイツ民主共和国	21.5	54.4	−32.9
ポーランド	39.1	45.7	− 6.6
ルーマニア	49.2	51.1	− 1.9
ソ連	61.0	42.8	+18.2
チェコスロヴァキア	28.6	44.0	−15.4

資料：《Ежегодник СЭВ, 1975》стр. 327-332

注：ここで輸出とは各国の総輸出額のうち原・燃料輸出の占める比重(%)を，輸入とは，各国の総輸入額のうち原・燃料輸入の占める比重(%)を，それぞれ示している。

コールマイは，セフ諸国の原料貿易総額における各国の比重を出している(第 8 表)。ここでは，それと同じ作業はできないが，各国の輸出総額のなかで，原料および燃料の占める比率と，輸入総額のなかでの原燃料の比重とをとって，その 2 つの値を相互比較してみると第 9 表のとおりになる。この表には，輸出・入量の絶対額ではなく，輸出・入の総額にたいする原・燃料の比率の加減であるという点や，輸出・入の範囲が域内貿易に限定されていないというような欠陥はあるが，何れにせよ，ソ連が，セフ諸国のうち，ただ 1 つ原燃

第 10 表　セフ加盟諸国の機械輸出および輸入　(単位：%)

	A 輸出				B 輸入				A-B			
	1960	1965	1970	1974	1960	1965	1970	1974	1960	1965	1970	1974
ブルガリア	12.9	24.8	29.0	39.9	43.9	43.7	40.6	40.7	−31.0	−18.9	−11.6	− 0.8
ハンガリー	38.6	33.2	32.6	33.1	28.5	28.8	30.9	30.4	+10.1	+ 4.4	+ 1.7	+ 2.7
ドイツ民主共和国	49.0	49.8	51.7	49.4	12.7	18.0	34.2	26.4	+36.3	+31.8	+17.5	+23.0
ポーランド	28.3	34.8	38.5	37.0	27.1	32.9	36.2	38.4	+ 1.2	+ 1.9	+ 2.3	− 1.4
ルーマニア	16.7	18.8	22.8	20.7	33.6	39.9	40.3	34.0	−16.9	−21.1	−17.5	−13.3
ソ連	20.7	20.0	21.5	19.2	31.0	34.0	35.5	32.4	−10.3	−14.0	−14.0	−13.2
チェコスロヴァキア	45.7	49.1	50.4	46.2	21.7	30.0	33.4	36.6	+24.0	+19.1	+17.0	+ 9.6

資料：《Ежегодник СЭВ, 1975》, стр. 327-332.

注：ここで輸出とは，各国の総輸出額のうち機械輸出の占める比重(%)を，輸入とは，各国の総輸入額のうち機械輸入の占める比重(%)を，それぞれ示している。

料の純輸出国であることだけは，確認され得よう。

同じような計算を機械の輸出入について，1960, 65, 70, 74 の各年についてやってみた(第10表)。ここでもまた，上に原・燃料についてのべたと同じ，データの上の欠陥があることは別として，ソ連だけが機械の純輸入国であるという確証はでてこない。ただ，ソ連が機械の純輸入国であるという，ここにでてきた事実は，ブルガリア，ルーマニアが機械の純輸入国であるという事実とは，その意味を異にするであろうし，機械の純輸出国であるハンガリー，ポーランドにくらべて，機械の純輸入国であるソ連が工業的に後進国であるということもいいえないであろう。とすれば，この表に示された，ソ連が機械の純輸入国であるという事実は，ソ連が原燃料の純輸出国であるということを offset するためにもたらされたことであるという，上来の議論の，1つの証拠とみてもいい。

ソ連が，原料の主要輸出国であり，後進国の機械の購入国であるということ，このことは，いかなる意味をもつであろうか。アウシュは，この点について，つぎのように書いている。「経済文献のなかで，この問題は，多くのソヴェト，ドイツ，チェコスロヴァキアの著者たちによって，論じられている。たとえば，ソ連のデータによれば，1966-70 年のソヴェトの対セフ貿易で，原料輸出のための余剰を生産するためには，35 億(国内)ルーブルにのぼる投資が必要であり，他方，他のセフ諸国からのソ連の機械輸入は，わずか 10 億ルーブルの価額の投資を節約することを許すにすぎなかった。」[14]そのあとで，アウシュは，O. T. ボゴモロフの所説を引用している。ボゴモロフは，つぎのように書いている。「……主要な原料，燃料をセフ諸国へソ連が輸出するための資本の必要量は，原料や燃料の支払分としてはいってくる機械を自国で生産する場合の資本の必要量より，3-3.5 倍大きい。鉄鉱石，鉱物肥料を生産するための原料，石炭，電力を輸出して外国から 1 ルーブル受取るためには，機械を輸出する場合の 5-8 倍の資金をわが国の国民経済に投資しなければならない。」[15]

以上で，つぎのことがわかる。域内貿易のひとつの特徴は，後進国(先進国ではない)が機械・設備の輸出を増大し，主としてソ連がそのうけとり国になり，ソ連は，セフ諸国の必要とする原・材料の主要な供給国となっている点であり，このことは，ソ連にとっては，むしろ経済的に不利であるにもかかわらず，その状態は，おそらく，50 年代以後，70 年代の今日まで続いているであろう，ということである。つまり，ソ連の経済的負担において，セフ諸国の原燃料問題が解決している点が，域内貿易のひとつの特徴である。

では，その出発点となっている，セフ諸国内の原・燃料問題は，どのようにしておこってきたのであろうか。この問題は，貿易問題の範囲をはなれるので，ここでは，とりあえず，それについて言われている 1 つの意見を示しておくにとどめる。

アウシュは，つぎのように言っている。「原料資源にかんしては，セフ諸国は(ソ連をも含めて)一般的に，西欧諸国よりもはるかに恵まれている。」[16]

では，それにもかかわらず，セフ諸国に原燃料の一般的不足が感ぜられるにいたったのは何故であろうか。アウシュは，その点について，つぎのようにのべている。「一般的な経済的標準に従えば，最初にまず原料採取の技術的レヴェルが，セフ諸国では西欧より低かった。しかしながら，知られているように，原料採取の能率の差は，一般に，完成財について看取された能率の差よりもはるかに小さい。同様のことが労働生産性についてもあてはまる。この原料の採取において，労働生産性は自然条件にしたがって違っている。それだけではなく，加工作業の数や労賃費用はここではさらに小さい。したがって，私は若干の他の著者の意見に反対してこのことを強調したいのだが，セフ諸国と西欧諸国との間に原料生産における『負の差額地代』の存在することが，最初ほとんど想定

14) Sándor Ausch, *op. cit.*, p. 116.

15) О.Т. Богомолов, «Теория и методология международного социалистического разделения труда», Изд-во «Мысль», Москва, 1967, стр. 14-15.

16) Sándor Ausch, *op. cit.*, p. 36.

されなかった。この現象が，のちになってはじめて，種々の原因によって，明らかになってきた。すなわちエネルギーや完成財を生産するさいの非経済的な技術的状態が，原料にたいする需要を不均衡に増大させた時に，また，立地の決定が地質学的な資源賦存状態や，そしてまた輸送上の距離を正しく考慮せずになされた時に，あるいはまた，種々の原因によって，他の世界からの原料輸入が困難になり，しばしば貧しい自国の産地から採取するよりも高価になった時に，この現象が，明らかになったのである。」[17]

この説明は，卒読しても，やや意味がとりにくい。とりあえず，それを簡素化して，「負の差額地代」云々の箇所をぬかしてよみとって，これを箇条書にしてみると，つぎのようなことではなかろうか。

1)　セフ諸国において，原料採取の技術的なレヴェル，労働生産性が，西側にくらべて低いこと。

2)　工業の技術的な水準の低さが，原料需要を過度に増大させたこと。

3)　立地条件の決定が，資源の賦存や，鉄道輸送の距離などとは無関係に決定されたこと。

IV　域内貿易の「自由化」

60年代以後，セフ諸国の経済改革，集権的計画化から分権的計画化への移行とともに域内貿易の「自由化」要求が，おこりはじめた。

たとえば，ティボール・キッシュは，外国貿易の国家独占制度の解除ないしは緩和を要請し，それに代えて，セフ関税同盟を設立せよという。関税同盟の主張については，必ずしもその理由は明確ではないが，それはひとまずおこう。キッシュによればソ連は，いまや先進工業国となり，あらゆる関税競争にも勝ちうるような国であり，外国貿易の国家独占の保護を必ずしも必要としない。これに対して，ソ連を除くすべてのセフ諸国は，国内市場は小さく，国産原料は乏しく，輸出の圧倒的部分は完成品から成っており，国民所得は輸出の増大なくしては，成長しえない。これらのセフ諸国にとっては，企業間の直接的な経済関係の設定や，東西経済関係の拡大が必要であり，そのためには少なくとも外国貿易の国家独占の緩和が必要である[18]。

サンドル・アウシュは，これとはやや異なる言い方で，問題に近づく。彼によれば，社会主義世界市場は，国際的価値形成の機能を果しておらず国際価値は存在しないか，または，きわめて限局された意味でしか，存在しない。また，世界市場という限り，商品の国際的交換だけでなく，生産の諸要素(資本や労働)の多少なりとも自由な移動を必要とするが，社会主義世界市場には，そのような移動がない。アウシュによると，このことが，域内における様々の困難や不都合の原因である。貿易量ののびなやみも，専門化の進展の不充分も，国民計画の相互調整の困難もそうである。これらを除去するために，市場機能および市場法則の機能をとりいれるというのである[19]。

ここでは，紙面の制約もあり，「自由化」諸論の問題点について，これ以上の展開ができない。別の機会にゆずろう。

(一橋大学経済研究所)

17)　Sándor Ausch, *op. cit.*, p. 36-37.

18)　Tibor Kiss, *International Division of Labour in Open Economies with Special Regard to the CMEA*, Akádemiai Kiádo, Budapest, 1971, pp. 187—202 (ティボール・キッシュ著，名島修三訳『開放経済と国際分業』合同出版，1974年12月，215—235ページ)。

19)　Sándor Ausch, *op, cit.*, 60—71.